

〔怪異辯斷^五〕山鳴之事、古今多キ事ナリ、皆地中奮氣之所爲ナリ、地中ニ空穴有テ、奮氣吹發スルニ因テ聲ヲナスモノアリ、又其地ノ總體ニ陽氣厚ク、鬱伏ノ氣常ニ有テ、陰氣ト擊シテ鳴コトアリ、日本諸國ノ中、山壑又ハ古塚時有テ鳴事多有之、紀州ノ熊野、吉野ノ大峯、富士山、出羽ノ羽黒山ノ類、其外四國中國、或ハ九州ノ内ニモ、山鳴又ハ天狗倒シト號スル者多ク有之、皆地氣鬱伏ノ氣多キ所ニシテ、其氣時有テ夜分ノ陰氣ニ感ジテ鳴動スル也、晝ハ無之者ナリ、總テ和漢共ニ、大山ニハ奇怪ノ類多シト見得タリ、其怪皆山ノ勢氣ノ變動ニ因テ也、和州葛城大峯、九州彥山ノ類、其外古跡ノ高山ニ、奇怪ノ類多有之、此類ノ山、皆自平地直立、凡ソ七八町乃至十町ニハ不過、富士山ハ平地ヨリ凡二十町ノ山也、富士山絶頂ニ詣デ、夜ハ岩穴ニ宿シテ、數日ヲ歷タル者アリ、予ニ語テ曰、富士山ノ半腹以下ニハ、奇怪多有之ト云トモ、絶頂ニ於テハ、曾テ奇怪ノ事無之、唯風寒嚴キノミト云リ、是ヲ以テ按ニ、平地ノ上七八町ノ間ノ一筋ノ所、山精游氣ノ會スル處ニシテ、變怪有之ト云トモ、絶頂ニ至テハ、其部ヲ過テ、山精游氣ヲ拔出ル故ニ、卻テ變怪無者ナリ、總テ地氣ノ變動ニハ、様々ノ義有リ、怪ニシテ又怪ニハ非ズ、

〔百練抄^十後鳥羽〕文治三年四月九日庚辰、春日山鳴動云々、

〔當代記^三〕慶長九年七月二十二三日比、三川鳳來寺山夥動搖、衆徒彼山滅亡、歟之由ヲ存、本堂エ打寄居ス、

〔鹽尻^十〕享保九年甲辰五月十三日、奥州岩城領^{内藤丹後}七万石 巳の時より、熇暑甚敷、人家燻赫にたへず、水を汲て頸を洗ひ、浴するに忽ち湯となる、年寄たるもの、幼き童及び病床に臥せる輩、一時に正氣を絶し、又即座に死せしもの數をしらす、川澤も蒸熱し、煎したるが如く、池魚林鳥ことごとく、煩死せしとかや、かゝる事は聞も不及とぞ、信州木曾の奥山なる僧の曰、酷暑廻りて雷發すれば、やがて暑氣散ず、雨なくして山嶽温熱の毒氣發せざれば、拔出て山中陰烟、氣昏々として野を衝